入選

家族で考えた水のこと

高岡市立牧野中学校　二年　山本　耕太郎

「家族のために、水が毎日必要です。」

と、アフリカの女の子は往復五十分以上かけ水くみの責任を負っていました。それを初めてテレビで見たとき、僕は何とも言い表し難い気持ちになりました。助けてあげたいけれど方法が分からない……、それがこのときの僕の気持ちでした。

それに比べ日本では水道水があるにもかかわらず、コンビニやスーパーでミネラルウォーターを買うのが当たり前の時代です。母が小学生の頃の学校では、ちょろちょろ水が上向きに出てくる噴水型水飲み場などで、家庭では、お茶を沸かさない日はそのまま水道水に氷を入れて飲んでいたそうです。マンションの貯水タンクの汚染が問題視され、安心・安全な水の需要の高まりと少量ペットボトルの登場により、今の形態になったようです。母にそれらの話を聞いたとき、僕はあのアフリカの女の子がこの日本に来たらどう感じるだろうかとふと頭をよぎりました。

家にある防災リュックの中には五百ミリリットルペットボトルの水四本が大切にしまわれています。また東日本大震災を経験した日本では、いつ起こるか分からない自然災害に備えて備蓄する水はとても大切なものだとも考えられます。

しかしやはり、アフリカの水くみの光景が僕の心から払拭できず、学習専用端末でアフリカの現状を調べてみました。すると、女の子や女性が毎日水くみに費やす時間は二億時間、これは八百三十万日、あるいは二万二千八百年に相当し、この時間は石器時代に空のバケツを手に水をくみに行き二千年まで家に戻れないことに匹敵すると書いてありました。この時間があれば家族と過ごしたり友だちとたくさん遊んだり勉強したりすることができるのにと思いました。僕は言葉にならないほどショックを受けました。

このことがきかっけで僕と家族は水について何時間も考えました。水がたやすく手に入らないアフリカに対して僕たちが各々募金をして、井戸の設置の支援に少しでも協力できるだろうか、などたくさん話をしました。しかし、正直なところ結論は出ず、家族みんなの知恵を出し合っても、この水の問題はとても難しいものでした。そんな時、僕は小学四年生の頃の担任の先生が青年海外協力隊でボランティア活動をしていたという話を思い出しました。先生はとても熱心に笑顔で、派遣されたバングラデシュでのお話を僕たちに伝えてくださいました。それを振り返り、実現できるか分からない、そんなに甘いものではないと十分に分かっているけれど、

「僕も挑戦してみたい！」

と、いつかアフリカに行きたいと思いました。

有言実行できるまで僕は、この日本で、恵まれた水に心から感謝し、たくさん勉強して生きていきたいと思います。もちろん、基本的な節水、例えば歯磨きをするときはコップを使う、シャワーの時間を一分間短縮する、野菜や食器のため洗い、その他僕の家のＳＤＧｓをコツコツと積み重ねていきたいです。